

クリスティーナ・クルーリ
近現代史・教授
ペロポネス大学、ギリシア

オリンピック大会、オリンピズムおよび国際協調主義 : 歴史的展望
:

Olympism は歴史の一部である。

オリンピック大会を開催することは歴史に対する権利を主張することである。

ピエール・ド・クーベルタン(1935年)。

1. はじめに

オリンピック大会とスポーツは今日世界の人々にとって、国際的であり日常文化の基礎的要素となっている。これは印刷物や電子情報の中にスポーツが占め位置、場所によって確認できるかもしれない。つまり学校内外における教育過程でのスポーツや体操の重要性、体操やトレーニングの急速な普及、サッカーファン、スポーツ宣伝とスポーツ産業が有する経済的比重の増大、それと同様に、近代オリンピックの更なる精巧な光景などである。現代のオリンピック大会は世界規模の発展を示す20世紀の最も重要な組織のうちの1つであることに誰も異論はない。

これらから見て、スポーツが1つの「グローバルな」あるいは「総合的な」現象であり、社会の縮図であるということが出来る。従って、スポーツ研究にとって各実例がその歴史状況で考察されることが重要である。あるいは、反対に、スポーツ研究は、ある特別なスポーツが所属している社会を帰納的に知ることが出来る。簡潔に述べるなら、スポーツは演劇のように、永久に普遍的な人間の活動であるという事実にもかかわらず、それらを理解および解釈するには歴史的な理解(historicization)を必要とする。

オリンピックとOlympismに関しても同様である。近現代オリンピックが古代オリンピックに直接リンクされたという印象が一般化されているが、歴史的に分析すれば、それらとの間の本質的な違いがある。私たちが、古代と近現代の大会の関係について話す場合に、「連続性」の代わりに「不連続」を使用するほうがより正確である。実際に現代の研究者によるスポーツ史は、「不連続」の概念を強調し、伝統的なものが現代の産業社会に移行した1つの徴候としてスポーツの発祥を説明している。したがって19世紀のオリンピックの復興は連続性の文脈では理解できず、むしろこれに反して18世紀から西洋社会で起こった、大きな変化(経済的、社会的、イデオロギー的そして文化的)の枠組みの中でのみ理解できる。

他方では、Olympismもまた歴史上文脈化された現代の1つの現象である。それは、19世紀のオリンピックの復興と現在まで続く20世紀の定期的開催に緊密にリンクしている。Olympismはグローバルな現象だと広く信じられている。オリンピック関連の研究が理想化する一般的な像は、オリンピックをOlympismの教育および倫理的価値や理想実現の手段として描いている。(オリンピズムの)理論的な基礎はピエール・ド・クーベルタンの文

書によって提供され、関連したオリンピック理念や理想の支持者によって更に深められている。しかし、クーベルタンの思想内でも進化が見られる。彼の著述によって、私たちが「Olympism」という標題の下に彼の価値感を1つの体系まとめる上で、彼の変遷が見える。

今日、私たちは、その内容に関してあるいはそれが意味する倫理的かつ教育的な価値に関する明瞭な考えを持たずに「Olympism」を使用している。地球上の多くの人々は、昨年の北京オリンピックを見ながら、Olympismが古代のオリンピックにリンクされ、それが古代ギリシャで発展した運動だと、恐らく誤解している。しかし、Olympismとは実際に何であろうか？ その内容は明白になるだろうが、誰によって？ Olympismは、近代社会でどのように受容され、利用されたのであろうか？ また、私たちの教育制度の中にオリンピックの価値を統合することは可能だろうか？

私は、これらの質問すべてに答えるのではなく、概念と実際を探求する。近現代オリンピックの歴史研究者として、私は、オリンピズムを歴史上の文脈に置き、そしてその内容をよりよく理解するために、オリンピズムの異なった指標を探求する。

本論文で私は、(a)新しい世界的な機関、国際的なオリンピックを産んだ19世紀後半の歴史上の文脈の分析;(b)オリンピック復興の探求者、ピエール・ド・クーベルタンの理念;(c)国際的なプロジェクトとしてのOlympismの主要要素;(d)オリンピックの国際協調主義およびナショナリズムの共存、を分析する。

2. 近現代のオリンピック（*modernを近現代、近代、現代と訳し分ける）

2.1. ソルボンヌ会議（Congress）（1894）でのオリンピックの復興

私たちが知っている形式でのオリンピックの復興の始まりは1892年11月25日に遡る。パリのソルボンヌで開催された「仏陸上競技協会 Union des Societes Francaises des Sports Athletiques」によって組織された祝祭的イベントでクーベルタンが初めてオリンピックの復興を提唱した。第2の、そして決定的なステップは、1894年7月にソルボンヌで再び提起された。アマチュアリズムが会議の主要な議題であったが、オリンピック復興も、独立した課題として含まれていた。会議名は、（直前に）「アマチュアの国際会議」から「オリンピック復興のための国際会議」へと変更された。1894年6月23日の総会（Session）で、アテネは近代オリンピックの最初の開催都市として選択され、その決定は熱烈に賞賛された。

近代オリンピックは-私の知る限り-西暦4世紀以降消失した古代の制度が成功裏に復興したユニークなケースである。近代の大会がその着想、原則および価値観を得るためにそれらの古代の例を参照していたという事実は、古代ギリシャオリンピックと19世紀の国際的オリンピックとの間に歴史的連続性があったという誤解を招いた原因である。しかしながら、歴史的展望として、私たちは次の2つの点で始めるべきである:

- (1) 古代から19世紀までの連続性はなく、「復興」という用語は非常に適切なものである;
- (2) 身体運動は古代社会と現代社会では、全体的に異なったイデオロギー的、社会的機能を持っていた。

古代と近代のオリンピック(それらが1896年に復興した形式を意味する)の間の違いは、その大会の宗教的性格、アマチュアリズム、成績(記録)、女性の位置そして競技の位置等に見ることが出来る。さらなる違いは、古代の競技会が国内的なものであったのに比して、近現代では国際的なものであるという点である。

2.2. 古代と近現代のオリンピック

2.2.1. 宗教

古代のオリンピックは宗教儀式の全体に統合されており、独立したものではなかった。すなわち、レクリエーションや活動の自立したものではなく、死者と神に敬意を表した宗教儀式に組み入れられたものであることが特徴である。宗教的感覚が古代スポーツのイデオロギーの土台だった。それは大会の間に生け贄とパレードが行われ、また何人かのオリンピックの勝利者が崇拜され、避難所の隣で競技会が開催された。さらに、私たちは、死んだヒーローたちが大会と共に敬われる習慣も知っている。

近現代の世界では、これに反して、スポーツは、他の祝賀から完全に分離され、独自の日程表を得た;さらに、それら自身の中で完結してきた。スポーツ日程は定期的に行われるが、宗教や政治的なイベントには依拠しない。近現代のスポーツ競技会は、もちろん、古代オリンピックからの選択された特徴を組込む儀式および記号言語を採用している。これらは伝統的社会的宗教機能を現代風に転換した世俗化された機能である。

同時に、Olympismは、クーベルタンによって考えられたように、宗教上の語句で組み立てられている。ノーバート・ミュラーは次のように書いている:「クーベルタンは、大会の精神的な感覚を本質的に変更せずに、現代版へ古代オリンピックの宗教的目標を再導入した。」しかしながら、これは宗教ではなく哲学的、道徳的体系-「宗教的競技 religio athletae」である。

2.2.2. アマチュアリズム

オリンピック復興の1つの構成要素はアマチュアリズムであった。それは興隆しつつある中流階級の価値体系の表現であった。アマチュアリズムは古代に存在せず、近代社会の特徴であることは、身体運動が「レクリエーション」のために行われることやそれによって得られる楽しさはスポーツの実際の活動の中にあるという事実によって証明されている。アマチュア選手にとって、目標は勝利だけでなく(とりわけ)参加することである。これに反して、古代ギリシャでは、「スポーツ選手」は賞のために競争者を意味したものであり、「アマチュア選手」の概念は全く存在しなかった。

アマチュアリズムは、オリンピック復興の時に、西ヨーロッパで支配した価値観を最適な方法で凝縮したものである。それは、誕生と富により社会的エリートになった英国でのイデオロギーだった。その基本的な特徴は、スポーツ活動がいかなる実用性からも分離されたということであった-本質的には、仕事の概念としてのスポーツ(プロ)と対照的である。スポーツは「楽しみ」のためであり、それ自体が目的であった。それらは「顕著な余暇」-時間の非生産的消費-に言及したソースタイン・ヴェブレンが示したように、「有閑階級」の象徴的な優越性を保障した。

アマチュアリズムの第2の特徴はいわゆる「フェアプレー」である。すなわち、「文明化された」競技であり、参加者によって自主的に受容されたルールによって管理されたものである。運動競技の規則は近現代のブルジョアの価値観によって決定された:能力主義社会、平等、結束、個人主義等。トラックまたはピッチ上の競争は、「同等のもの」の「民主主義的」競争を基盤としていた。そして「最良のスポーツ選手」は社会的身分や継承された権利によってではなく、彼の個人の価値と彼の個人の努力ゆえに勝利した人である。運動競技では、普通選挙権の場合のように、投票者はみな「平等であり」、相手も「平等である。」また、いかなる社会的差異も考慮されない。

平等はアマチュアリズムの1つの構成要素であった。しかし、私たちはアマチュアリズムが養った隠された社会的排除を理解するために基礎な区別をしなければならない:(a)競争内での平等、および(b)競技へのアクセスするうえでの平等、である。競技は実際、競技するすべての人々に共有される規則によって規制された。競技場で、あるいはピッチにおいては、すべてが平等であった。しかし、競技へのアクセスの平等ではなかった。アマチュアリズムはこの明白に社会的制限を課した。「楽しみ」のための運動ではなく金銭的報酬のために運動したプロ・スポーツマンは排除された。

2.2.3. 成績

古代の大会では、成績の記録に興味はなく、勝利だけが考慮された。この理由で、円盤投やランナーの記録はどこにもない。競技の規則はもちろん成文化された。また、特別に訓練された審判 *hellanodikai* がクロノメータ(精密時計)や写真判定が無かった時代に、誰が勝者かを決定した。これに反して、オリンピック復興から現在まで、成績の詳細な記録が世界的レベルで保存されてきた。そして、その記録自体が目標化され、ドーピングまでも導びくことになった。

ジーン・ピエール・ヴェルモンが指摘するように、「勝利は自己満足である。他の何物によって測定される必要もない。それ自体絶対的なものだ。」古代スポーツでは、「完成」の観念が主流であった。しかし、現代スポーツは「優越」の観念が支配的である。この点で、古代の勝利者は一時的な記録達成をしたチャンピオンではなく「*Olympionikes*」(オリンピックの勝利者)だった。勝利者の身体は、古代の大会と現代の大会の間の本質的な差を要約している:古代では、勝利者の身体は神の身体のようにであり、それは宗教的同一性を持ち、叙事詩のヒーローとなった;現代では、身体は制御可能、測定可能、そして医学的コントロールの対象である。

2.2.4. 女性

古代との重要な差は、さらに、女性の位置でも見い出される。女性はトラックだけでなく観客としても大会から除外された。古代社会では、女性の役割は家庭とその家事に制限された。19世紀に、身体運動の点で女性の位置は周辺的であったが、スポーツ観戦は禁止されなかった。古代とは対照的に、女性は、急速にスポーツ選手として、現代のスポーツのピッチで、および古典的な陸上競技でも参加を獲得した。さらに、19世紀前半(再び古代に対照して)から、体操は、少年だけでなく少女の教育にとっても不可欠であると考えられた。

1906年にアテネで開催された中間オリンピックは、「美と男性的な活力の偉大な祝賀」と考えられたが、デンマークの女性体操選手がチーム形式をとって公式に参加し、スウェーデン体操およびテニス競技(ギリシアは其中で女性のオリンピックのチャンピオンを生んだ)を行った。その時以来、オリンピック大会への女性の参加は相当に増加したが、北京大会までは男性の参加には追いつかなかった。実際に、2004年の大会では、女子参加は、全参加者の総数の40.6%であった。

2.2.5. 種目

最後に、現代は古代に存在しなかった種目を創造した。主として英国起源のフットボールのような団体競技、あるいは新技術に関係した自転車や自動車のような種目である。近現代オリンピックの場合、古代に存在したがオリンピック競技ではなかったもの(水泳、ボート、重量挙げなど)と、テニスなどの全く新しい競技が新たに加えられた。その上、マラソン競争は、古代からヒントを得たものだが、1896年の第1回アテネ大会では大成功を収めた新たな発明であった。

3. Olympism

3.1. 現代の教義

古代には **Olympism** はなかった。これは古代と近現代の重要な違いである。ピエール・ド・クーベルタンの以前に復興された様々なオリンピックの場合も古代と同様であった。オリンピック復興の時代を話す場合、私たちはオリンピックと **Olympism** を識別しなければならない。今日、これらの2つの要素は互いに緊密にリンクし、オリンピックが今 **Olympism** に統合されていると捉えられているが、これは19世紀には該当しなかった。17世紀にそしてほとんどは19世紀までさかのぼるが、オリンピックを復興させる様々な試みは、同様なイデオロギー的資源を持ったが、クーベルタンが行ったように、モラルと教育体系は提案しなかった。彼らは古代の遺産に刺激され、近現代の状況に古代の制度を復興させようと欲した。この意味でいえば、彼らはクーベルタンの復興プロジェクトとオーバーラップした。しかしながら、オリンピックの賞賛を含む **Olympism** の概念は、そのモラルおよび教育的次元を含むことによって完全に異なるものであった。従って、もし私たちがクーベルタンの思想を理解しなければ、**Olympism** は理解できない。

3.2. ピエール・ド・クーベルタン

1863年に生まれて、1870年の普仏戦争でのドイツへの敗北以降、フランスに普及していた「復讐」の社会状況の中でクーベルタンは成長した。この雰囲気の中で、敗北はドイツの教育の優勢によるという思考とフランス教育制度の批判は決まり文句であった。したがって、クーベルタンは、彼の同時代の多くの人々と同様に、フランスの若者の、さらにより広くは、フランス国民教育の改善方法を探求した。クーベルタンの愛国心はスポーツと体育の方針で方向付けられた。フランスのスポーツがスポーツを通してより多くの先進国の競技を知る必要性—特に英国との接触によって知り得た—とともに、国際化についての彼の考えを明瞭に述べた。クーベルタンは、より若い世代が身体的、道徳的そして知的に

成長する手段としてスポーツが役立つような全面的な復興のフレームワークを古代オリンピック復興に期待した。オリンピックは「人類初期の4年ごとの賞賛である」と言う彼の有名な表現は、彼の思想の核心をついている。

その上、クーベルタンは、オリンピックの周期的な開催と「哲学的・信仰教義」を関連づける「Olympism」を造語した。クーベルタンによれば、Olympism は、「紳士」の価値体系や「religio athletae」に含まれていた倫理的要素に言及した。それらは同時にオリンピック教育の形式を採った。クーベルタンは、1906年から1918年の間に彼のオリンピックの理論を徐々に作成した。その期間中に彼は Olympism の象徴的な言語を考え出した。それは競技宣言、スポーツ選手のパレード、およびオリンピックの普遍性および平和主義を示すオリンピック旗、を含んでいた。クーベルタンの Olympism はパトリック・クラストルによれば、「啓発されたエリート主義の男性主義(masculinism)」であった。彼のモデルは「共和主義者の紳士」であった。

実際に、Olympism は哲学的であり、また教育的でもある。それは一方では精神的・モラル的内容であり、「religio athletae」である。それは「より高い生活の理想や完成の追求への前進」－「等しい出自」のエリートに帰属しながら－「騎士道」の徳性や審美観をも包み込んでいる。

Olympism の内容は優越性のモラルとして示されてきた。一般にスポーツは、モラルを高揚させると考えられてきた。ジョージ・ヴィガレロが書いた様に:「スポーツは、いつも「悪」に対する戦いで育てられてきた。その内部的な戦いが不可欠である。その存在の合法化は、倫理に依存している。それはモラル清浄によって常に管理されると見られなければならない。その必須な範例としての特徴は通説を構築する:それは、誰が高められるか、また、誰が追放されるかを決定する。」それから、資格ある人々と除外される人々、つまりアマチュアとプロ、「汚れた人」と「クリーンな人」が明確にされる。スポーツは、近代社会の主要な価値を圧縮した倫理を示す:つまり平等、能力主義社会、結束、民主的競争である。反対に、特に若い人々に対して、オリンピックは、現代世界の倫理モデルを供給したり、パラダイムとして役立つように求められる。

他方では、Olympism は「努力や身体的調和の培養と、優越性と計測の必要性の結合に基盤を置いたオリンピック教育である。有名なオリンピックのモットー「citius, altius, fortius」(より速く、より高く、より強く)は1891年に聖ドミニック聖職者アンリ・ディドンによって考案され、1894年にクーベルタンによって運動競技の価値(特定の競技でのよりよいパフォーマンス)ばかりでなく、より一般的に、モラルおよび教育学の価値にも採用された。

IOCの会長職から彼が引退した年(1925)以降、クーベルタンは、彼が1880年代以来専念した計画に関して彼の精神的な遺言を残そうと試みた:理想的な教育はバランスのとれた人間の統合的な構成を意図する。1927年のオリンピアへの訪問において、彼は「すべての国家の若いスポーツ選手」に次の言葉を述べた:

Olympism は、身体的な忍耐とエネルギーと同様にモラルの高貴さと純粋性のための学校となることが出来る。しかし、これは貴方が運動競技の名誉および公平の概念を貴方の身体的能力のレベルまで高めようとするときにのみ、起こるものである。

したがって、Olympism は、オリンピックの復興者によって想像され記述されたように、

身体運動ないし国際的なオリンピックによって普遍的な価値や理念を達成する媒体を提供する。

実際に、クーベルタンの著述が明らかにしているように、**Olympism** の内容はほとんど40年の期間にわたって定義された。最終的には、ドイツの哲学者ハンス・レンク(1964)によって「オリンピックの価値の統合」のセットとして要約することができる:

- ・文化的かつ宗教的祝祭
- ・芸術的かつ精神的なトレーニング
- ・エリートと平等の理念
- ・競争と競技
- ・スポーツマンシップ：フェアプレーおよび騎士道の精神
- ・大会の規則的な開催、伝統、そして休戦
- ・国際協調主義およびナショナリズム(「人々の理解」および文化的多元論)
- ・すべての運動競技の訓練の集合
- ・アマチュアリズムの記述
- ・オリンピックの独立
- ・古代モデルと現代の形式

クーベルタンの **Olympism** の構成要素をすべて要約するテキストは、1935年にラジオで放送された彼のスピーチ「現代 **Olympism** の哲学的基礎」である。彼は72歳であった(2年後に死んだ)。

クーベルタンの遺産は、IOCによって、およびオリンピックの価値およびオリンピックの教育について著述したすべての人々によって尊ばれた。全体像は戦後になって「**Olympism**」として形作られた。一方、同時にスポーツが日常の文化の中でその比重を増大させながら、全世界に広がった。

オリンピック憲章(1999)の中の **Olympism** の定義は、数十年前にクーベルタンによって総合された教義で未だ対応できている:

Olympism は生活の哲学であり、身体、意志そして心のバランスのとれた全体の中で讃えられ結合している。文化や教育とスポーツを混ぜ合わせながら、**Olympism** は、努力で見いだした喜び、よい例の教育的価値および普遍的で基本的な倫理原則に対する尊敬に基づいた生活様式を作成しようと探求する。

4. 国際協調主義とナショナリズム

国際協調主義とナショナリズムの同時発生は、オリンピック復興の瞬間から近現代のオリンピックを特徴づけた。1896年以来のすべてのオリンピックの組織と開催は、政治的、イデオロギックかつ文化レベルで、国際的、全国的かつローカルの要素の共存や相互作用によって特徴付けられる。実際、奇妙なことにオリンピックの国際化の最初の影響はナショナリズムとアスレティシズムの緊密な連携であった。象徴とは言え、オリンピックはその復興の瞬間から、国家対立の更なる場となった。

4.1. 国際協調主義のプロジェクトとしての Olympism

クーベルタンにとって、万国博覧会は鉄道と電信から出現した世界的なコミュニケーションの新しい機会であり、異なる国からのスポーツ選手の大会ともなったが、論理的な結果としてスポーツの国際化に導いたより広い運動を構成した。オリンピック復興によるこの国際化の目標は、スポーツの「統一」および「浄化」であった。その結果、現代社会ではその教育的伝導を果たした。

オリンピック大会の国際的な特徴は、徐々に確立された儀式および象徴によって見ることが出来る。オリンピックの国際協調主義は、現実的あるいは改革的ないずれにあっても、世界の人々の国際的な協力および平和共存の理想を促進するために象徴的言語を使用した。五輪のマーク、オリンピック旗、オリンピック賛歌、オリンピック宣言であり、一方、トーチリレー、開閉会式、そして同じくスポーツ選手の行進である。

輸送および人々のコミュニケーション速度が増加した時代に、スポーツの国際化が可能になった。コミュニケーションは万国博覧会を通じて他民族の知識や文化的達成の比較を可能にした。知識は競争と競技を増加させた—現在は国際的レベルで。

4.1.1. 万国博覧会

万国博覧会は、経済の国際化を反映し、競争観念を促進しながら、「進歩」と商易の祭典であった。産業化、公共交通機関、コミュニケーション、人々・資本・商品・市場の要請と原材料の移動等を通しての19世紀の経済の国際化は永続的な国際機関および組織を設立する条件を形成した。最初の万国博覧会がロンドンで開催された1851年と1914年の同地での再開の間に、42の博覧会が世界の30都市で開催された。これらの博覧会は、多くのビジターを引きつけて、団体観光旅行の出発点となった。

「進歩」および商易のこれらの祭典は啓蒙思潮の伝統の中にそのルーツを持っていた。啓蒙思潮は—フランス革命時—一方では社会的統合や教示の手段として機能した新たなタイプの祭典を導入したが、他方では、知識の地球的性質や「人類の一体性」への信頼を促進した。パリが国際的な勸業博覧会を主催した1867年から、これらの博覧会は運動競技大会をも含んでいた。また、第1回アテネ大会とは別に、最初のオリンピック諸大会(1900年、1904年および1908年)がすべて同じ年に同じ都市で開催された万国博覧会と関係があったことは偶然ではない。スポーツ・芸術的な競技と勸業博覧会との共存は、様々な国々で顕著であった。その中に私たちはアテネ(1859-1889)で開催されたザッパスオリンピックアードにも言及することができる。

競争の観念は万国博覧会の不可欠な部分であり、スポーツの領域にその反映を容易に見いだした。競争—正確に言うならば「より速く、より高く、より強く」というモットーによって意味される—を通しての運動競技の達成は、産業、科学および芸術での創造性や刷新を示す現代の著価値の全体を象徴化している。

達成の賞賛、記録と数量の探究は、現代のスポーツの中核的な特徴になった。競技記録の書きとめは近代オリンピックの開催時点から、重要な構成要素であった。そして競技選手の専門化、競技場での達成の賞賛、そして(ドーピングをしてまでも)新記録を達成することへの賞賛へと導いた。

4.1.2. 理想主義的な国際協調主義

同じ価値や行動の全体性を共有する他の世紀末的な「理想主義的な国際協調主義」と Olympism は遭遇した。それは次の4つである：赤十字(1863)、エスペラント運動(1887)、オリンピック運動(1894)およびスカウト運動(1908)である。「理想主義的な国際協調主義」(啓蒙思潮のコスモポリタン主義の相続人)は、より若い世代を「訓練する」ことにより、それらが現代世界の変革を望んだ。そのようなものは例えば、ボーイスカウト運動であり、Olympism と多くの共通性を持っていた：それは世界的であり、非政治的で、階級がなく、非人種的である。さらに、特に第一次世界大戦の後に、世界平和の促進と非政治的中立性、国際協調主義運動として Olympism は推進された。

理想主義的な国際協調主義は、教育、政治的中立、および国際的な協力および平和の目標による改革の観念のような、ひとまとまりのある共通の特徴を有した。

教育による改革理念

啓蒙思潮の教育的楽観主義に支えられて、理想主義的な国際協調主義は教育を通して変革を追求した。Olympism は、クーベルタンによって最初に考えられたように、主として教育制度であった。

既に、1889年のスピーチで、クーベルタンは、「スポーツ教育」を特定の主題、方法および規則を備えた教育学の体制として定義していた。この体制で、スポーツは意志の勝利および人間の理想の履行に結びついたので、モラルの次元は特に重要であった。

政治的中立

特に政治的中立性は19世紀後半のすべての非社会主義的国際企画(例えば1863年に設立された赤十字のような)によって、同様に計画された。それにもかかわらず、強力な社会的、政治的支持なしに国際的な企画は成功しなかったことは明白である。クーベルタンの運動競技の国際協調主義は、その第1段階の中で、ヨーロッパの貴族や王室の支援を獲得した。最高な支援はもちろん、ギリシア王室からであった。それはオリンピック復興によって国内の政治情勢の中にその名声と力を強化する機会を垣間見たからである。さらに、エドワード7世も1908年のロンドン大会に出席して、公式の開会を行なった。一方グスタフ5世(スウェーデン国王)は1912年ストックホルム大会に参加した。

国際協力と平和

1918年に、クーベルタンは Olympism の役割は「社会平和を維持し広げる」ことであると断定した。クーベルタンがオリンピック復興を考え始めた頃、ソルボンヌ会議(1894)の重要な参加者から判明できるように、国際平和運動とのイデオロギー的に類似していた。実際、クーベルタンの著述には国際協調主義と愛国心とのバランスが当時の平和運動の基本原則を反映している事が分かる。彼は、国家の多様性や人間間の対立を認識していたけれども、戦争の代わりに「文明化された」解決の必要性を促進しようとした。当時の平和は、「理想的なあるいは表面的なコスモポリタニズム」に依ってではなく、「啓蒙された愛国心」によって進められた。一方、自国への愛は人類への愛との均衡が保たれた。

4.2. ナショナリズム

Olympism の政治的中立、国際協調主義の支持にもかかわらず、オリンピックは現代の世界史的な機関として、20 世紀の国家主義者の対立、すなわち 2 つの世界大戦に巻き込まれてしまった。その上、19 世紀の戦場で彼らの国を防御する兵士の訓練を第 1 の目的とした体育は、民族運動に緊密に関係していた。近現代のオリンピックの歴史は、現代の政治的、経済的および文化史と密接な関係があり、人々の和解の精神や国際平和と一方では一国家的政治的対抗ともリンクしている。

4.2.1. 国家対立の場としてのオリンピック

最初の近代オリンピック以来、大会と IOC の構成は、国家を基準にした。Nation は、必ずしも State と一致するとは限らず、通常は優先される。クーベルタン自身の選択では、オリンピックでの国家的チームとその代表の構成に関して、必ずしも政治的地政学とは一致しない「運動競技地勢」が有った。したがって、ボヘミアやフィンランドのように自立した State ではなかった Nation が大会では自治的代表の権利を有していた。一方、同じ権利はアイルランド、カタロニアおよびバスクには許可されていなかった。

さらに、競技場とピッチにおける勝利が Nation 間の対立のバランスを是正するために使用された。主として、ピッチでも競技場でも、「小さな」Nation は「大きな」Nation に勝つことができ、あるいは国家はその歴史的な「敵」に恥をかかせることができる。

4.2.2. 競技場内での国家 Nation

大会が行われる競技場では、Nation が参加している。開会式では、国旗が各 national チームの先頭に来るが、スポーツ選手の入場パレードは Nationhood (国家としての地位) に基づいて行われる。スポーツ選手の勝利も Nation (State) に基づいて分類される。さらに、授賞式での国歌演奏・国旗掲揚は、スポーツ選手が個人としてではなく国家のメンバーとして競技したこと—明らかにソルボンヌ会議での決定に基づいて—を思い起こさせる。

オリンピックのトラックでは、国家的競争は成績の量的基準のような共有される国際的言語を使用した。運動競技規則の成文化は、運動競技会と競技組織の国際的な規定によって、国家の優勢性の「客観的」な記録をもたらした。国家 Nation の名声はそれで測定可能となった：オリンピックのチャンピオンの数、彼らの達成した記録、およびどこで大会が開催されたかなど—それらがもたらした成功についてに依存している。

4.2.3. 国民的英雄としてのオリンピックチャンピオン

オリンピックチャンピオンは、Nation の「栄光」を表わし、国民的英雄として扱われる。実際に、1896 年のアテネ大会では、国民的英雄の新しいモデル—オリンピックチャンピオン(そして、一般的にはスポーツ・チャンピオン)—が初めて現れた。同時に、スポーツ光景は国民感情と所属に関係した。オリンピックでは、観客は愛国心の対象として位置づけられた。

1896 年のアテネでは、観客の振る舞いは「自分自身」が競争者と同一であることを示した。ギリシアの大衆の反応はギリシアのスポーツ選手の成績によって、歓喜と失望の間を揺れた。競技場で最初のギリシアの勝利の記述を読むことは面白い:

ちょっとして、ミトロポロスの数は増加し、ギリシア国旗が掲げられた。彼は競技場での最初のギリシアのオリンピック勝利者である。熱狂は、コントロールを越えて破裂した；涙が溢れ、帽子は宙に舞い、また、ハンカチが熱狂的に振られた。王室による信号による喝采および無限の賞賛は、言い表せないほどの雰囲気であった。

しかしながら、国民的英雄になった最初のギリシアのスポーツ選手はスピリドン・ルイスー1896年のマラソン競争の勝利者ーであった。この競技は、古代の起源でもなく、近現代のものでもない、唯一のものであった。それは、勝利者のために銀カップ（当初の優勝者には銀メダルが授与された）を提供したマイケル・ブレアルの考えで、最初のオリンピック大会のために作成されたものである。大会の前にさえ、マラソン競争は国家的に盛り上がっていた。ギリシャでは勝利者はギリシア人であらねばならないと期待されていた。このため、ルイスが勝利者として競技場に入ってきたとき、ギリシアは彼にその国民的英雄を認識した。ルイスが授賞式で民族衣装「foustanelle」を纏って登場したことは、新しいタイプの国民的英雄の象徴的な重要性を増強した。

他方では、ルイスの勝利はヨーロッパの勝利としてギリシャの国境を越えて迎えられた。出席していた人々は、西洋文明の価値を確かなものとしたオリンピックで、すべての国家が共存できることを感じ取ることが出来た。マラソン競争は、紀元前5世紀にペルシャ人の「アジアの野蛮」に対するヨーロッパ文明の勝利のように、ギリシャの勝利の象徴化であった。Hugues leルー（フランスの新聞フィガロの特派員）の記述は非常に雄弁であった：

さらに私たちが競技場の端で農夫が先頭で現われるのを見たときー我が同胞ではなくてもー彼が何人であろうと、誰もが歓喜で震えた。私たちは、ギリシアの地がその息子に勝利を与えるために走らせたと思った。それは、まさにギリシア人でなければならなかった。「あなたたちを分割しているものを忘れなさい。野蛮人は拒絶された。文明は再度勝利した。」

結論

オリンピックの復興と斬新な哲学的・教育教義である Olympism の推進は、近現代性、産業化および国際化の歴史的な文脈の中で分析し理解することができる。近現代のスポーツやオリンピックの競技を特徴づける特徴の大半は、歴史上の実例ーつまり実行、訓練、量化、民主主義、進行、平和などーに関係がある。それらの古代モデルに比べて近現代のオリンピックの主な革新的な特徴は、その国際的な性格である。19世紀後半と20世紀前半における他の国際協調主義、例えば、国際平和運動、赤十字およびボーイスカウトのような運動と共に Olympism が現われた。それは政治的中立を必要とし、世界平和を支えた。しかしながら、Olympism の政治的中立、国際協調主義を支持する戦略にもかかわらず、オリンピックは、現代の世界的な機関として、20世紀における国家主義の矛盾および主要な国際的な衝突（すなわち2つの世界大戦）に対して影響を受けずにはいられなかった。したがって、オリンピックと Olympism は1896年の復興以来、国際協調主義とナショナリズムの間で揺れてきた。オリンピックからの排除ー任意あるいは強制ーおよびボイコットは第一次世界大戦からユーゴスラビア戦争(1991-5)まで常に続いてきた。競技場は国際関係の競

技場にもなってきた。

すべての脅威と危機にもかかわらず、Olympism はどうにか残存し、私たちの時代の主なメガ競技の1つになった。かつて競われた、適度なオリンピックは、技術革新(ラジオ、映画、テレビ)および商業化によって、大衆視聴の巨大なイベントに変容した。(近年の)オリンピックチャンピオンは、もはやスピリドン・ルイス(1896年のアテネでのマラソン競争の優勝者)のようには見えない。オリンピックのチャンピオンの(新旧の)イメージの比較は Olympism の変容の最良の実例である。しかし、変更されていないイメージでさえ、それらの意味は変化した。オリンピック旗は、まだオリンピックの価値の象徴であろうか、あるいは商用ロゴであろうか？

以上